

今後検討すべき課題に関する意見（案）

- 片仮名語の氾濫が非常に気になっている。日本は、漢字を輸入し、仮名文字を創って、漢字仮名交じり文を発明した。漢字仮名交じり文というのは、他の言語を取り入れられる柔軟なものであるが、例えば英語の言葉をそのまま片仮名で受けて英語仮名交じり文にするのではなく、据わりのいい日本語の言葉に置き換えるというような考え方があってもいいのではないか。西洋の言葉を考え方ごと輸入するのではなく、自分たちのものの見方や考え方を言葉に反映させることが大切である。
- 国語施策の成果の上に立って、常用漢字表をより使い勝手のいい、理にかなったものにしていく組立て直しが必要ではないか。分かりやすく通じやすい文章を書き表すための目安という目的からすると、単漢字を選定して列挙した漢字表という方法には限界がある。漢字1字としては易しくても難解な熟語を作るものもあるし、反対に「挨拶」や「拉致」のように、よく使われる熟語にある漢字とはいえ、ほかでは余り使われないものもある。熟語単位、語彙単位で漢字表を組み立て直すということをしてもいいのではないか。
- 常用漢字表の組立て直しの手始めに、現行の語例欄の見直しから始めるという方法がある。語例として挙げられているものの中には、公に用いるには不適切と捉えられかねないものもある。数も少ない。これを検討していく中で、先ほど言ったような特定の熟語でしか使われないような漢字を整理して位置付け直すということもできる。語例と送り仮名との関係についても見直しが必要であろう。語例欄に動詞訓と名詞訓が両方載っているものもあれば、動詞訓だけ載っていて名詞訓はそこから類推するものもある。例えば「詣」は、「詣でる」という動詞訓と熟語の名詞の「初詣」だけ載っているが「もうで」と使いたいときはどうしたらいいのか迷う。そういう情報を充実させてはどうか。
- 常用漢字表を語彙の面から検討するとなると、どうしてもその語彙の持つ価値観というか、プラス／マイナスのニュアンスというものに目を向けざるを得なくなる。例えば、現在検討している「ショウガイ」の「碍^がい」を常用漢字表に載せるためには、常用漢字表の在り方を見直して、その字が作る語彙の持つ意味、あるいはそれが社会にとって必要であるかどうかということも考慮に入れるといった選定の基準の追加についても検討することになるのではないか。これまで、いろいろな分野で当たり前のように使われてきた言葉を、ふさわしさの面から見直すということが行われている。これは大切なことであるが、得てして誤解や思い込みによって過剰な反応をされたり、あるいは分野によって扱いがまちまちだったりということが起こりがちである。国語分科会として、それらを統一的に把握して、判断材料とか指針を提供することはできないものか。こうしたテーマを扱うのが難しいことは承知しているが、個々の言葉に対する見解を出せなくても、どういう問題点があるのか、どういう観点から扱うべきなのか、論点を整理することはできるのではないか。

- 常用漢字で構成されている言葉で複数の表記があるものが少なからずある。法令や公用文で用いる際には統一されているものもあるが、辞書によっては標準的な書き方がどちらか見解が分かれるものもある。多様な表現を規制するのではなく、公用文などの実用的な文章を分かりやすく書くために、例えば、標準と許容のような緩やかな示し方をすることができないか。
- 口語の中で生きている文語的なものについて整理してはどうか。文語なので国語施策の範囲外になって、そのルールが適用できない。例えば「べき」は「べし」の連体形であり、文末では「べきだ」とすべきであるが、「べき」で止める表現が広まっている。「べき」を口語の終止形として認めるというようなことを考えてもいいのではないか。また、「来る〇日」というのは、常用漢字表では「た」を送らないことになっているが、「くる」と読んでしまう人がいる。どのように扱えばいいかという考え方を提示することはできるのではないか。
- これまでのように、国語施策が一定の決まりを作り、それを守ってもらうということは、ほぼやり尽くしているし、そういう行き方は今の時代に合わなくなってきている。しかし、言葉や表現、国語に関する考え方の枠組みのようなものを示すということに関して言えば、国語施策にはまだまだやれることがたくさんあるのではないか。
- 教育の分野に踏み込んでしまうことになるかもしれないが、豊かな日本語を身に付けることの大切さを、世の中に改めて気付いてもらいたい。分かりやすさ、正確さというものが追求されてきた一方で、言葉の持つ品、格、重み、歴史といったものが失われてきているのではないか。表現が安っぽく平板になって、それぞれ感じていることはもっとあるはずなのに皆が同じようなことしか言えなくなってきた。どうしたら豊かな語彙力、日本語の持つ言葉の力、歴史の大切さを再認識してもらえるかということが、片仮名語の氾濫と対をなし、ずっと気になっている。文化の一端として「日本語すごいぜ！」といったことを検討できたらいい。
- 既に平成 25 年の「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」に書かれていることであるが、「国語に関する世論調査」の更なる活用について考えてはどうか。このデータというのは、長きにわたって蓄積されていて、かつ、国語の施策を決めていく上で重要な基礎データになっている。それを更に活用しやすくするようなシステムチックな調査の仕方、質問項目の選び方、それをどう結果として分析していくのかというようなところまでちょっと踏み込んで検討していくと面白いのではないか。
- 国語施策の考え方がどのようなものであるのかを改めて確認しておきたい。現在の公用文の在り方に関する検討は、言わば交通整理であろう。国語施策はこれまで交通整理の役目を果たしてきて、多くの方の役に立ってきたという側面がある。それ以外にも考えるべき問題がある。例えば、今、言葉によって人を傷つけるということが社会的な問題になっている。そういうものに対する提言ということも大事になってくると思われる。さらに、もう一つ、文化的な啓発という役割もあるのかもしれない。そのような交通整理、提言、啓発など、まずはどう

いった目的で施策を講ずるのかについての議論が必要ではないか。

- 海外から来て、日本で仕事をし、生活する人が増えていくことが予想される中で、そういう外国人に対する「やさしい日本語」といった取組が行われている。それとともに、日本語を母語とする人のための「やさしい日本語」が必要になってきているのではないか。言葉の言い換えについてはそれなりに研究もされ、国立国語研究所などによって提案もなされているが、生活をより良くしていくための言葉の在り方という観点で考えてはどうか。

例えば、法律、福祉、医療等に関してなど、一定の手続を進める際に関連する用語が難しく、それを理解しないと目的が達せられないというようなことが生活の中にはたくさんある。そういった場合に生かせる日本人のための「やさしい日本語」という課題に踏み込んでいくという方向性もあるのではないか。

- 言葉は時代とともに変わっていくものであるが、現在、特にジェンダーの問題、文化や歴史の問題、そういったいろいろなことが入り交じって、差別や偏見として捉えられるようなところまで行ってしまうこともある。表面的なところだけを見て、これは差別であるといった行き過ぎた判断がされないように、言葉というものをよく見詰めることが必要である。とはいえ、多くの人にとって、言葉に関して深く考える機会を得ることは難しい。そこで、何か行き過ぎをせき止める役割を果たしたり、提言したりすることができたらいいのではないか。

- 現在も公用文について検討しているように、これまでの国語施策は発信の在り方の側に重点を置いてきた印象がある。言語文化を受け取る受信の在り方、具体的には、読書に関する課題を取り上げてみてはどうか。

- 国語審議会からの歴史で一番成果が上がったのは、常用漢字につながる検討結果であった。それに関係付けて、今問題になっている、人への配慮とか、差別とか、不快表現とか、そういったことに取り組むのが、国語分科会としての今までの蓄積を生かすとやりやすい。今起こっている外来語の氾濫の問題とか、誹謗中傷の問題とか、そういったことにもつながるような提言ができるのではないか。

- これまでの国語施策の成果のうち、日本語学の主な事項のうち語彙論と文法論に関する内容がない。日本語学の成果を取り入れた考え方に基づいて、現代社会の問題に何か提言するという枠組みで考えてはどうか。しかし、文法論と語彙論の成果を生かしてきちんとした調査をしてというのは時間が掛かることである。2年後に何か提言するということも必要であろうが、これまでの蓄積も踏まえ長いスパンで、社会の役に立つようなことができればいい。